

昨日の自分を超越しようとする生徒の育成

— 探究的な学習過程の設定とICTを用いた遠隔合同授業を通して —

長期研修員 倉澤 秀祥

《研究の概要》

本研究は、生徒の自己肯定感を高めるためにそれに関わる能力である「主体性、粘り強さ、コミュニケーション能力」を育てること、社会科における現代的な課題について考え、よりよい社会を構築しようとする生徒を育成することの二点を目標とした。二つの目標を達成した育てたい生徒の姿を「自他の考えを尊重しながら、粘り強く主体的に、現実的な課題について考え、よりよい社会を構築しようとする生徒」とし、本研究では「昨日の自分を超越しようとする生徒」とした。

手立てとして、探究的な学習過程とICTを用いた遠隔合同授業を取り入れた。探究的な学習過程として、「情報の収集、整理・分析、中間検討、考えの再構成（再度の情報の整理・分析）、最終検討」の場面を設定した。中間検討、最終検討において、異なる学校の生徒が交流するICTを用いた遠隔合同授業を取り入れた。

キーワード 【社会-中 自己肯定感 探究 ICT 遠隔合同授業】

群馬県総合教育センター

分類記号：G02-03 令和5年度 282集

本報告書に掲載されている商品又はサービスなどの名称は、各社の商標又は登録商標です。

<各社の商標又は登録商標>

Google、Google ドキュメント、Google スプレッドシート、Google Jamboard は、Google LLC の商標又は登録商標です。

なお、本文中には ™ マーク、® マークは明記していません。

I 主題設定の理由

現在、グローバル化、情報化が急速に進み社会が大きく変化している。その社会の中で子供たちが生きる力を身に付け、社会で活躍する人材としての基礎的な資質・能力を養うことが重要となってくる。令和3年1月の中教審答申¹⁾では社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0」時代の到来したことが記述されている。その中で「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り開き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている」と記述されている。新・群馬県総合計画では「始動人」をスローガンとして「自分の頭で未来を考える力、動き出す力、生き抜く力を持った人」が挙げられており、自ら考え行動する生徒の育成が必要である。そのため、「認知的スキル」に加え、「社会情動的スキル」（非認知能力）についてのアプローチが求められている。アメリカのペリー就学前プロジェクトによると「自己肯定力」、「やりぬく力」、「主体性」、「コミュニケーション能力」といった「社会情動的スキル」を育てることは教育効果を高め、その後の人生によりよい影響を与えることが分かっている。

「自己肯定力」、「やりぬく力」、「主体性」、「コミュニケーション能力」などの「社会情動的スキル」を育てるためには「主体的、対話的で深い学び」のための単元構想を通して「社会的な見方・考え方を働かせる活動」が重要である。中学校学習指導要領解説社会科編（平成29年告示）²⁾において、「社会的な見方・考え方は「課題を追究したり解決したりする活動において、社会事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握し、その解決に向けて構想したりする際の視点や方法である」と記述されている。「主体的、対話的で深い学び」のための単元構想を行うことで、課題を追究したり、解決したりする授業を通して社会的な見方・考え方を働かせる授業が行いやすくなる。社会的な見方・考え方を働かせる授業の中では「他者とコミュニケーションを取り、よりよい解決法を考える。粘り強く課題解決に向けて活動する。主体的に学習課題に取り組む。」などの力も育成されると考えられる。

研究協力校を「社会情動的スキル」の視点から見ると以下のとおりである。小学校から単学級の小規模校であるため、人間関係が固定化されており、授業中に発言をする生徒が決まっている。そのような環境の中で、多様な意見を踏まえ、異なる考えや価値観をもつ相手に、自身の考えを分かりやすく伝える機会が不足してしまっている。そのため、「誰とでもコミュニケーションを取れる力」や「どのような相手に対しても自らの考えを伝えようとする主体性、粘り強さ」を育成することが課題である。また、少子高齢化により地域社会を担う生徒一人一人の重要性が高まっている中、生徒が協働しながら創造性を働かせてよりよい社会づくりに向けて考えることが重要である。国や県の教育政策と協力校の課題から「他者と協働して、自他の考えを尊重しながら、粘り強く主体的に、現実的な課題について考え、よりよい社会を構築しようとする生徒」を「昨日の自分を超えようとする生徒の姿」とし、本主題を設定した。

上記の生徒の姿を実現するために「探究的な学習過程の設定とICTを用いた遠隔合同授業」を手立てとして取り入れた。探究的な学習過程を取り入れることで「自ら調査し、発見し、課題解決のための提案をする活動」を教科学習の中で行うことが可能となり、主体的に生徒が学習に取り組めるようになると考えた。また、「課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現」の過程を繰り返し実施することにより身に付けた知識や技能は生きて働く知識及び技能となり、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等も身に付くと考えられる。本研究では探究的な学習過程を「課題の設定、情報の収集、整理・分析、中間検討、考えを再構成（再度の情報の収集、整理・分析）、最終検討」の六つの過程に分け、単元を構成した。思考力や判断力、社会情動的スキルがより高められるように工夫した。自ら課題や解決策を見だし、生徒が粘り強く学習に取り組めるようになると考えられる。

ICTを用いた遠隔合同授業については先行研究において、「コミュニケーションソフトウェアが統一されていない、相手校探しや学習カリキュラムの打合わせが難しい、適切なテーマが見付からない、遠隔合同授業をしたいが進め方が分からない」などの課題が取り上げられている。しかし、小規模校に

対してICTを活用して他の学校と結び付き、児童生徒同士の学び合いや体験を通じた学習活動の充実を図ることは、児童生徒が多様性のある学習活動を保証するためには不可欠である。そこで本研究では「生徒が活発な交流をするため探究的な学習過程をどのように設定した単元構想が望ましいか、ICTを用いた遠隔合同授業はどのような点に着目し実践したらよいか」を研究する。ICTを用いた遠隔合同授業をスムーズに行えるようになれば、異なる考えをもつ多くの児童生徒と一緒に学習することで、互いに話し合い、学び合う活動場面を小規模校でも保証することが可能である。

二つの手立ての相乗効果により、「主体性、粘り強さ、コミュニケーション能力」などが育つと考える。これらの力を育てることで自己肯定感を高め、本主題での「昨日の自分を超越しようとする生徒の育成」につなげる。

以上の理由から主題を「昨日の自分を超越しようとする生徒」、副題を「探究的な学習過程の設定とICTを用いた遠隔合同授業を通して」と設定した。

II 研究のねらい

探究的な学習過程である「課題の設定、情報の収集、整理・分析、中間検討、考えを再構成（再度の情報の収集、整理・分析）、最終検討」を取り入れた単元を構成し、中間検討と最終検討にICTを用いた遠隔合同授業を取り入れたことは、生徒の「主体性」「粘り強さ」「コミュニケーション能力」などの成長を促し、「自己肯定感」が高まった姿が見られるとともに、現実的な諸課題について考え、よりよい社会を構築しようとする「昨日の自分を超越しようとする生徒」を育成するのに有効かを明らかにする。

III 研究仮説（研究の見通し）

1 探究課題の設定、情報の収集、整理・分析の場面

「社会事象の共通点や違いに気づき、新たな考えを生み出せるような課題」を設定することで「主体性」が育成されるであろう。また、情報の収集、整理・分析の場面ではICTを用いて学習を積み上げていくことで生徒の「粘り強さ」が育つであろう。

2 中間検討、考えを再構成する場面（再度の情報の収集、整理・分析）

既習事項を活用し自分なりに考えたことを他校の生徒に発表する「ICTを用いた遠隔合同授業中間検討」を通して「コミュニケーション能力」を育成することができるであろう。また、中間検討を踏まえた考えを再構成する場面（再度の情報の収集、整理・分析）を取り入れることで、「粘り強さ」が育成されるであろう。

3 最終検討

「まとめる」過程において、「探究課題」に対する回答として成果物を作成する。成果物を他校の生徒と交流し、互いに認め合い、肯定的な評価をもらうことで「自己肯定感」が高まるとともに、探究的な学習過程を通して現実的な諸課題について考え、よりよい社会を構築しようとする「昨日の自分を超越しようとする生徒」を育成することができるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 研究上のキーワードの定義

「昨日の自分を超越しようとする生徒」とは

「非認知能力の概念に関する考察（Ⅱ）～『非認知能力』の要素における関連性の観点から～

(2020年11月 一般財団法人 日本生涯学習総合研究所)」によると、自己肯定感については「自分のあり方を積極的に評価できる感覚、および自分の価値や存在意義を肯定できる感覚」と書かれている。その関連項目として「主体性」「コミュニケーション能力」「自己管理能力」が挙げられている。本研究では「自己管理能力」についての記述の中で挙げられている「粘り強さ」に注目した。また「自己肯定感」の育成については「他者からの評価への自信」「経験に基づく自信」が関わっていることが書かれている。探究的な学習過程の設定とICTを用いた遠隔合同授業を実施することにより日常的に交流する機会がない同学年の他者とコミュニケーションを取り、互いに認め合い、肯定的な評価をもらうことは生徒の自信につながっていき、自己肯定感が高まると考えられる。本研究で育てたい「昨日の自分を超越しようとする生徒」とは「主体性、粘り強さ、コミュニケーション能力」を身に付け、「自己肯定感」が高まった生徒の姿と合わせて、「社会科の資質・能力」を身に付けた姿である「他者と協働し自他の考えを尊重しながら、主体的に粘り強く現実的な課題について考え、よりよい社会を構築しようとする生徒」とする。

(2) 手立ての説明

① 探究的な学習過程の設定について

令和3年1月の中央教育審議会の答申¹⁾では義務教育において「学校ならではの児童生徒同士の学び合い、多様な他者と協働した探究的な学びなどを通じ、地域の構成員の一人や主権者としての意識を育成」することが重要視されている。本研究では探究的な学習における四つの過程である「課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現」を工夫し、「課題の設定、情報の収集、整理・分析、中間検討(まとめ・表現)、考えを再構成(再度の情報の収集、整理・分析)、最終検討(まとめ・表現)」と六つの学習過程を設定した。このことで、社会科における資質、能力や主体的に学習に取り組む態度が高まると考えられる。

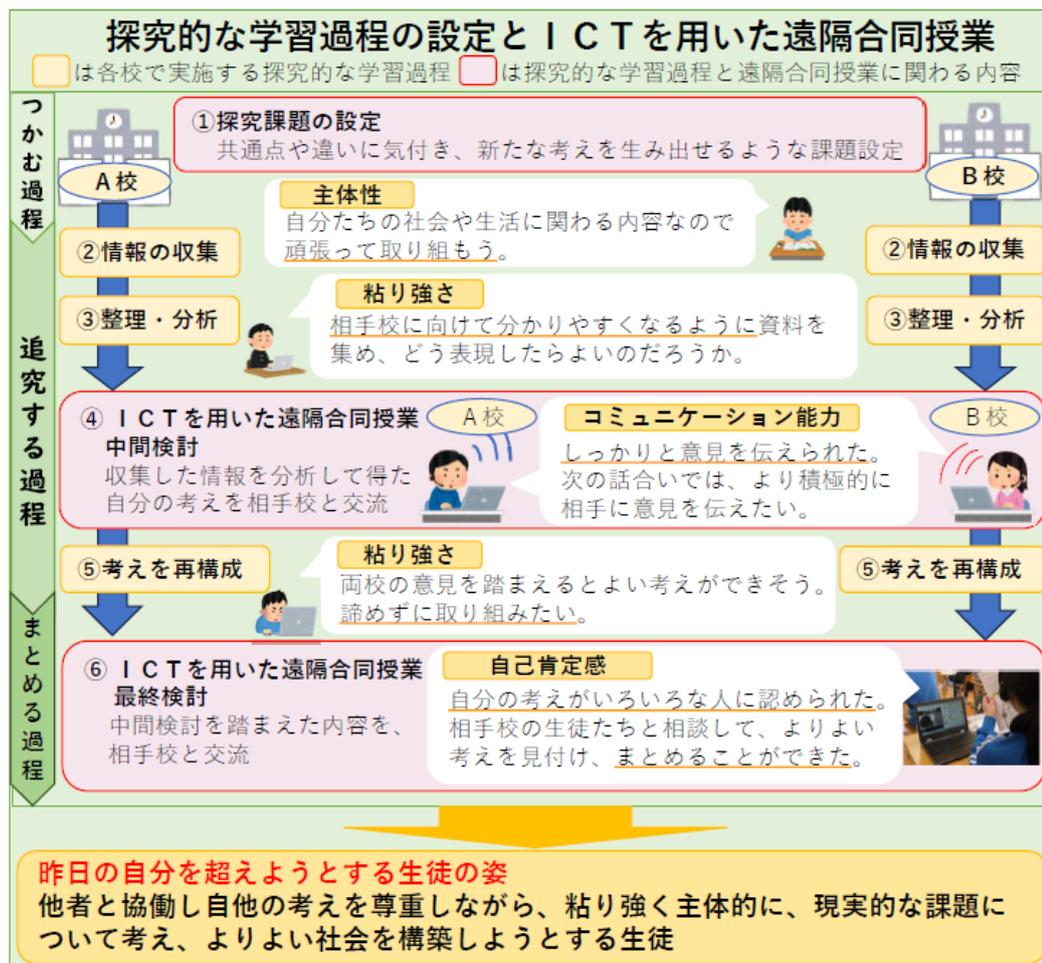
「探究課題の設定」については「社会事象の共通点や違いに気付き、新たな考えを生み出せるような課題」を設定し学習活動を進める。探究的な学習過程の設定に加え、後述の「ICTを用いた遠隔合同授業」を取り入れることで「相手意識をもった情報の収集、整理・分析」が可能となる。加えて、多様な考え方を取り入れた中間検討、中間検討の内容を踏まえた考えを再構成する場面を小規模校でも充実させることが可能となる。異なる考えをもつ、他の学校の生徒同士であるからこそ、自他の考えを尊重した「中間検討、最終検討」が可能となり「他者と協働し自他の考えを尊重しながら、主体的に粘り強く現実的な課題について考え、よりよい社会を構築しようとする生徒」の育成が可能となると考えられる。

② ICTを用いた遠隔合同授業について

文部科学省 遠隔教育システム活用ガイドブック第3版(令和2年度 文部科学省)によると、遠隔教育には大きく12のパターンがある。今回、主に実践するのは「A2 遠隔合同授業」である。他の学校の教室とWeb会議システムを用いて意見交流をする。計画的に合同で行う授業の場面を設定することで多様な意見に触れたり、コミュニケーション能力を培ったりする効果がある。

Web会議システムを使ってグループごとの小会議室を作成し、発表活動や議論、検討を行う。日常交流する機会のない生徒同士が交流することで主に「相手に応じた話し方」「自他の意見を尊重する態度」などが育成されることが考えられる。

2 研究構想図



V 研究の計画と方法

1 授業実践の概要

授業実践 I

対象	研究協力校 中学校第3学年23名
実践期間	令和5年11月6日～11月24日 8時間
単元名	「地方自治」
単元の目標 (実践談当部分)	自分たちが住む地域の政治に関心をもつことができる。主体的に地方自治に参画するための姿勢や意義について自分なりの考えをもつことができる。

2 検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し1	「社会事象の共通点や違いに気付き、新たな考えを生み出せるような課題」を設定し学習活動を進めて行くことは「主体性」の育成に有効であったか。情報の収集、整理・分析の場面でICTを用いて学習を積み上げていくことは生徒の「粘り強さ」を育成することに有効であったか。	○アンケート分析 ○学習活動の観察 ○振り返りシート
見通し2	既習事項を活用し、他校の生徒に発表する「ICTを用いた遠隔合同授業中間検討」はコミュニケーション能力を育成するのに有効であったか。考えを再構成する場面を取り入れることは、「粘り強さ」を育成するとともに社会的な見方や考え方を育てるのに有効であったか。	○探究シートの記述 ○抽出生徒の分析
見通し3	単元の「まとめる」過程においてICTを用いた遠隔合同授業を取り入れたことは「自己肯定感」を高めることに有効であったか。探究的な学習過程取り入れ、単元を構成したことは「昨日の自分を超えようとする生徒の姿」に迫るために有効であったか。	

3 評価規準

授業実践 I

知識・技能	地方自治の仕組みを首長と議会の関係を中心に理解している。
思考・判断・表現	片品村、下仁田町の実情から政策を作成する活動を通して、対立と合意、効率と公正、民主主義、個人の尊重などの視点を用いながら、地方自治について多面的・多角的に考察している。
主体的に学習に取り組む態度	片品村、下仁田町の山間地域に共通する課題解決に向けて政策を考え、主体的に社会と関わろうとしている。

4 指導及び評価、ICT活用の計画

授業実践 I（全8時間計画）（授業実践 I を記載。各単位時間の詳細は別添資料参照）

過程	時間	■ねらい □学習活動 ★ICT活用に関する事項	知	思	態	◆評価項目<方法（観点）> [記]：記録に残す評価 ○指導に生かす評価 ●評定に用いる評価	
つかむ	1	■地方自治がどのような考えに基づいて行われているか市町村の広報紙を基に気付き、地方自治について興味・関心をもつことができるようにする。 □地方自治体の仕事を片品村（広報かたしな、令和5年4月号）・下仁田町（広報しもにた、令和5年5月号）を基に調べ、課題を設定する。 (★)				○	◆地方自治体の活動に興味をもち、単元の課題解決に向けて、主体的に学習を進めていこうとしている。 <ワークシート（態）>
[本時のめあて] 地方自治はどのような考えに基づいて行われているか。単元の課題を設定しよう。							
[単元の学習課題] 片品村・下仁田町の山間地域を活性化する政策を県議会に提出しよう。							
追究する	2	■地方自治の仕組みを地方議会と首長の役割を中心に理解し、地域の事例を基に理解できるようにする。 □地方自治（議会や地方選挙）の仕組みについて、片品村、下仁田町、群馬県の条例を基に調べる。	●				◆地方自治の仕組みを地方議会と首長の役割を中心に理解し、地域の事例を基に説明している。 <ワークシート（知・技）[記]>
[本時のめあて] 地方自治はどのような仕組みで行われているのか。片品村、下仁田町、群馬県を基に調べよう。							
	3	■各地方自治体の歳入、歳出表を活用して、財政事情と町づくりの課題点を考えられるようにする。 □片品村・下仁田町・前橋市の財政面の課題と重点について、他市町村のグラフなどと比較したり、収入と支出の様子から分析したりして、財政の仕組みと課題について考える。		●			◆地方自治体の地方財政についての複数の自治体の資料を比較し、山間部の地方自治体の課題点を考えている。 <ワークシート・発言（思・判・表）[記]>
[本時のめあて] 市町村の財政にはどのような違いがあるだろうか。							

4	<p>■片品村、下仁田町のよさや課題点を調査し、地域社会の活性化を実現するための自治体の政策をグループで調べ、まとめられるようにする。</p> <p>□自治体のよさ、課題点について資料を収集しまとめる。</p>	○			<p>◆山間部の地方自治体のよさや課題点に着目し、自分の自治体の政策を調査し、スライドに整理している。</p> <p><ワークシート（知・技）></p>
<p>[本時のめあて] 地域社会のよさや課題点はどのような点か。自治体の実態や取り組んでいる政策などをまとめ、発表できるようにしよう。</p>					
5	<p>■それぞれの地域のよさや課題点について発表し、両自治体の共通するよさ、課題点についてグループで考えられるようにする。（★協力校と相手校とをオンラインでつなぐ）</p> <p>□二つの地域の共通点や相違点に着目し、二つの自治体のよさや課題について、表にまとめる。</p>	○			<p>◆二つの自治体のよさや課題に着目し、共通点や相違点を発見している。</p> <p><ワークシート（思・判・表）></p>
<p>[本時のめあて] 両自治体にはどのようなよさ（強み）や課題（弱み）があるのだろうか。また、共通するよさや課題点はどのような点か考えよう。</p>					
6	<p>■それぞれの地域のよさや課題点を踏まえ、山間地域の自治体で共通して実施できる政策について政策案を考えることができるようにする。</p> <p>□前時の活動を踏まえ、山間地域の活性化が行える政策を考え、先進的な事例を調査する。</p>	●			<p>◆山間部の地方自治体を活性化する政策についてよさや課題点、政策分野に着目しながら政策案を作り出している。</p> <p><ワークシート・発言（思・判・表）〔記〕></p>
<p>[本時のめあて] 前時の片品村・下仁田町のよさや課題を踏まえて、山間部の両自治体を活性化するために、共通して実施できる政策を考えよう。</p>					
7	<p>■山間地域の自治体で共通して実施できることについて、資料を収集し、自分の政策のよさが相手に伝わるようにスライドにまとめることができるようにする。</p> <p>□両地域のよさや課題を把握し、山間部の自治体を活性化するための提案内容について詳しくスライドにまとめる。</p>	●			<p>◆山間部の地方自治体を活性化するための政策について共通点や相違点、よさや課題に着目しながら、必要な資料を収集し、説得力のある政策スライドを作成している。</p> <p><ワークシート・発言（思・判・表）〔記〕></p>
<p>[本時のめあて] 私たちの暮らす山間部の両地域を活性化する政策案を作成するため、必要な資料を収集し、政策スライドを書き上げよう。</p>					

まとめ	8	<p>■群馬県議会の「若者ご意見箱」に投書するのにふさわしい内容を「効率」「効果」の二つの視点から考え、地方自治に参画しようとする意欲を高められるようにする。（★協力校と相手校をオンラインでつなぐ）</p> <p>□2軸チャートを用いながら政策の実現可能性を議論し合い、地方自治に参画する態度を養う。</p>			●	<p>◆地方自治に参画するために自分たちがどのように自治に関わっていったらよいかを今までの学習を振り返りながら考えている。</p> <p><ワークシート（態）〔記〕></p>
<p>[本時のめあて]</p> <p>私たちの暮らす山間部の地域をよりよくする政策について議論し、「若者ご意見箱」に提案するものを選ぼう。</p>						

VI 研究の結果と考察（授業実践Ⅰについて）

1 検証の見通し1について

「社会事象の共通点や違いに気付き、新たな考えを生み出せるような課題」を設定し学習活動を進めて行くことは「主体性」の育成に有効であったか。情報の収集、整理・分析の場面でICTを用いて学習を積み上げていくことは生徒の「粘り強さ」を育成することに有効であったか。

協力校での事前アンケートは以下のとおりである。「主体性」や「粘り強さ」については生徒から「まずは自分の意見をもつことが大切なので、自分の考えをもってから話し合おうとしている」「積極的に発言している」「授業で気になったことは実際に家で調べてみている」などの肯定的な意見もある一方、「聞かれたことが分からないと諦めがちになる」「自分の意見がまとまらず友達に頼ってしまう」「興味があることは調べたいと思うが、社会科ではなかなか興味をもって調べたいと思うことがない」「自分なりに考えるが主体的に活動に移すことがない」などの記述が見られた。本単元では「片品村・下仁田町の山間地域を活性化する政策を県議会に提出しよう。」という探究課題（単元の課題）を設定した。探究課題を意識しながら生徒は学習に取り組んだ。単元の課題設定の授業を終えての生徒の感想は以下のとおりである（図1）。

- ・地方自治体が行っている活動に少し興味をもつことができた。これからの授業も一生懸命学んでいきたい。
- ・片品村独自の政策を広報誌から調べることができた。他にも群馬県の政策や下仁田の政策も見て違いを見付けてみたい。

図1 単元の課題設定に関わる生徒の感想 下線部は主体性に関わる記述

図1を見ると、他の自治体と比較しながら自分の自治体を見直したいといった発言や、自分たちの自治体をよりよくしたいという感想が見られた。探究的な学習過程とICTを用いた遠隔合同授業のための課題設定が有効であったと考えられる。

情報の収集、整理・分析の過程では「地方自治はどのような仕組みで行われているのか。片品村、下仁田町、群馬県を基に調べよう。」というめあてを提示した。地方自治の仕事、仕組み、地方財政について自分の地方自治体と他の自治体を比べながら生徒は調査活動を行った。また、自分の住む自治体のよさや課題点、取り組んでいる政策に内容についても調査し、相手



図2 情報の収集・整理分析する場面で活用したWeb掲示板

校に発表できるように整理・分析を行った。情報の収集の場面ではWeb掲示板を用いたり、Google Jamboardを用いたりした。情報を分かりやすくまとめ、整理・分析の場面で生かせるようにした（前ページ図2、図3）。

整理・分析する場面では、自分たちの自治体のよさや課題点、よさを伸ばしたり課題点を克服したりするための政策について調査した。住民でない相手校の生徒に中間発表に向け発表するため、「片品村を知らない人に政策を伝えるためにはどうしたらよいか考えながら資料を作成しよう」と言葉掛けをし、支援した。そして、図4のようなスライドが作成された。このスライドには、相手に分かりやすく伝えるために自分たちの実体験を踏まえた記述や、地理的な状況などが入力され、どのように伝えたら相手に伝わりやすいのか、工夫しながら粘り強く情報を整理・分析している姿が見られた。整理・分析の場面で書かれた学習後の感想を見ると粘り強さや主体性に関わる感想が書かれていた（図5）。

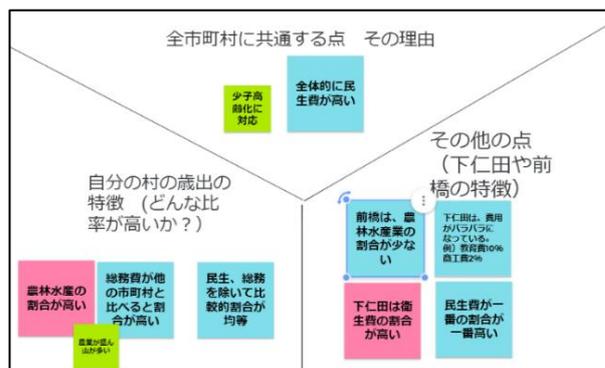


図3 情報の収集・整理分析する場面で活用した Google Jamboard

図4 整理・分析の場面で作成されたスライド

- ・片品村を紹介するためいろいろな面から調べた。どのようなことをしているか、どのような効果があるのか。インターネットや広報誌から調べまとめられた。農業、林業、観光業などは発展していて、情報量が多くて大変だった。調べてみてより片品村のよさを感じられた。

図5 整理・分析の場面での生徒の感想 下線部は主体性、粘り強さに関わる内容

2 検証の見通し2について

既習事項を活用し、他校の生徒に発表する「ICTを用いた遠隔合同授業中間検討」はコミュニケーション能力を育成するのに有効であったか。考えを再構成する場面を取り入れることは、「粘り強さ」を育成するとともに社会的な見方や考え方を育てるのに有効であったか。

「コミュニケーション能力」についての事前の調査では、クラス内の生徒との交流の記述が多く書かれた。中間発表の場面ではWeb会議システムの小会議室作成機能とGoogleスライド、Googleスプレッドシートの共有機能を同時に用いて、研究協力校と遠隔合同授業を行う相手校で地域のよさや課題、各自治体の政策についての発表、分析を行った（図6、図7）。思考ツールであるSWOT分析図（図7）をGoogleスプレッドシートで作成し、両自治体のよさ（強み）や課題（弱み）の共通点を日常交流する機会のない他校の生徒と議論しやすくするために使用した。

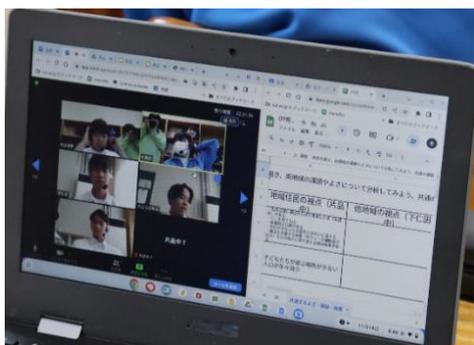


図6 中間検討の様子

片品村		他地域に住む人の視点 (下仁田中)		共通する・課題やよさは?	
よさ (強み)	地域に住む人の視点 (片品中) 夜空がとてもキレイ 自然がとても豊か 滝 色々な動物が見れる 人口減少、少年高齢化	他地域に住む人の視点 (下仁田中) 色々な動物が見られる	共通するよさ (強み)	自然が豊か 動物も多くなる	野菜などの多くの農作物を生産販売している
課題 (弱み)	人口減少、少年高齢化 クラスの半数以上は、将来片品村を出ると考えている。	少年高齢化が重なっている 人口減少	観光場所がある		
下仁田町		他地域に住む人の視点 (片品中)		共通する課題 (弱み)	
よさ (強み)	地域に住む人の視点 (下仁田中) サラダパーク ねごとこんにやく 荒船 風穴、道の駅、神津 牧場、あじさい園、 などの観光 自然に囲まれている	他地域に住む人の視点 (片品中) 山が多い 道の駅や牧場などの観光場所が多くなる	共通する課題 (弱み)	人口が少ない	有害鳥獣
課題 (弱み)	メインで観光する場所がない 少年高齢化が進んでいる	人口が少ない メインで観光できる場所が少ない 少年高齢化	少年高齢化		

図7 思考ツール（SWOT分析図）

生徒たちは自分の地域と交流する地域について思考ツール（SWOT分析図）を見ながら比較、検討していた。常時交流しているわけでない相手との話し合いでは「話し合う視点」に加えて思考ツールなどを生徒に与え、検討内容を明確にする必要がある。発話記録を見ると、生徒同士が生活体験や既習事項などを活用しながら、共通性やよさ、地域の課題に気付き、意欲的に話し合い、思考している様子が見られた（図8）。

- S 1 自然が豊かで動物も多い。特産物があるのは共通するよさだね。
- S 2 鹿や猿などの有害鳥獣は両自治体で出るのかな？自分たちの地域の畑ではイノシシの被害があるけど。
- S 3 確かに尾瀬は鹿の食害があるよ。他にも野生動物の被害を聞いているよ。自然豊かなことには課題の部分もあるようだね。
- S 4 では、有害鳥獣についても課題に入れよう。

図8 分析図をもとに考えを深める話し合いをしているグループの発話記録

生徒の感想を見ると、中間検討において、相手とのコミュニケーションが取れたことで山間地域をよりよくする政策を提案したいという思いが込められた感想が見られた。中間検討があることにより、政策を作成する際に両自治体の共通するよさや課題を踏まえた政策設定を行う考えを再構成する場面で粘り強く活動することが可能になったと考える（図9）。

- ・片品村のよさや課題を相手校の生徒に知ってもらうために頑張って作ったスライドを活用し、発表することができた。相手校の子の発表を聞いて共通する課題を見付け、積極的に話せた。課題からどのような政策を実施したら改善できるかなども少し言うことができた。
- ・農産物が有名なこと。自然が豊かなことが共通のよさだ。課題は人口減少、少子高齢化であることが話し合いを通して分かった。よさも課題も共通な部分が多かったので共同で政策を考えられそうだなと思った。

図9 中間検討を終えての生徒の感想の記述 下線はコミュニケーションに関わる記述

考えを再構成する場面ではSWOT分析図やWeb掲示板に掲示された情報をもう一度見直ししながら山間地域を活性化させる政策について中間検討や学習履歴を基に思考する様子が見られた。生徒の振り返りにも粘り強く考える様子とともに、既習事項を見直し、社会的な見方・考え方を深める様子が記述されている（図10）。

- ・今までに調べた条例や話し合った共通する強み、弱みなどの資料を見直し、政策を考えた。どの資料を使ったら説得力が生まれるか考えていきたい。
- ・先行事例やかかる費用を探すのが難しかったです。もう一度、設定理由や政策内容を見直してなるべく現実的なものにできました。よい政策案になったと思います。片品のことだけでなく下仁田やその他の山間地域の課題解決に少しでも力になれば嬉しい。

図10 考えを再構成する場面を終えての生徒の感想 下線は粘り強さに関わる記述

3 検証の見直し3について

単元の「まとめる」過程においてICTを用いた遠隔合同授業を取り入れたことは「自己肯定感」を高めることに有効であったか。探究的な学習過程を取り入れ、単元を構成したことは「昨日の自分を超越しようとする生徒の姿」に迫るために有効であったか。

自己肯定感に関する事前アンケート調査では「他者からの評価への自信、経験に基づく自信」の視点から二つの項目で作成している。「私は発言や発表などでクラスの生徒の役に立っていると思う」では「そう思う、ややそう思う」と回答した生徒は25名中10名であり「自信をもって意見を述べることができる」という質問では「そう思う、ややそう思う」と答えた生徒は25名中9名であった。自己肯

定感を高めるような活動を取り入れていくことは協力校にとって重要であると考えている。

「まとめる」過程では県議会の「若者ご意見箱」に投書するのにふさわしい政策を「効率、効果」の二つの視点から考え、グループで話し合い、一つ政策を選び出す最終検討を行った。今回の話し合いにおいても中間検討と同じように思考ツール（2軸チャート）とWeb会議システムの小会議室作成機能を用いて話し合いを行った（図11）。



図 11 Web 会議システムの小会議室作成機能と 2 軸チャートの同時使用

あるグループの検討の発話記録（図12）を見ると、他校の生徒たち

と話し合い、政策を選択するのに難しい様子が見られた。生徒たちが悩みながら、相手の意見を尊重しつつ、よりよい意見にするために思考をしている場面である。両校で共通の単元の課題を設定し、探究的な学習過程を通して自分たちなりに作成した政策を、ICTを用いた遠隔合同授業の形態で検討する場面であるからこそ、相手校の意見を尊重したいという考えが生まれ、この場面が発生したと考えられる。その後、自他の意見を尊重しながら二つの政策を組み合わせるとよりよい政策になるのではないかと考え、異なる学校の生徒で構成されたグループ内で合意形成に至ったことが発話記録から分かる。この生徒たちは最終検討を通して「相手の意見を尊重しながら、よりよい意見を生み出すため粘り強く、主体的に活動に参加することができた」と考えられる。

この場面は、他者と協働し自他の考えを尊重しながら現実的な課題について考え、よりよい社会を構築しようとする姿である「昨日の自分を超越しようとする生徒」の姿が見られた場面である。学習後の生徒の感想でも同様に多くの生徒から自他の考えを尊重して、自分の意見を伝えることが書かれ、「昨日の自分を超越しようとする生徒」の姿に関わる記述が見られた（図13）。

- S 1 NO 1 の政策（空き家カフェ）は新しい建物を建てる必要がないので費用がかからず人手も少なく短時間で実行できる点が良いよね。効果の面でも観光客に影響があったり、早く始められたり大きく作用すると思う。
- S 2 なるほど、自分もNO 1 がよいと思う。
- S 3 NO12 の政策（害獣駆除をしてそれを食べる）もよいよね。鹿やイノシシの課題は両地域にあってそれをプラスにするので多くの人のためになると思うし、長く効果が続くので効果的なのではないかな。他の政策より費用もかからないし、人手も少なく済むと思う。
- S 4 自分もNO 1 の政策が良いと思うな。多くの人への効果、特に住民の多くに効果があると思う。
（話し合いでなかなか決定できず悩む生徒）
- S 3 NO 1、12 を組み合わせるのはどうだろうか？ジビエカフェの提案はどうだろう。
- S 4 なるほど、それなら両提案のよさが生かせるね。

図 12 あるグループでの検討の発話記録

- ・相手に納得してもらえるように政策を考えたり、質問に答えたりするのは大変だと思った。地域をよく理解し、私たちにできることを、自信をもって提案することがとても大切だと思った。
- ・みんなが考えた政策を話し合う中で、相手の意見をよく聞いた上で、自分の意見をしっかり伝えることが大切だということが分かった。この授業を通して、自分への地域の理解が深まった。

図 13 生徒の感想 下線部は自己肯定感の高まりについて書かれている内容

実践後と実践前のアンケート調査を主体性、粘り強さ、コミュニケーション能力、自己肯定感の観点から比較すると以下の点が明らかとなった（図14～図16）。

「難しいと思える問題にも一生懸命取り組める」という主体性、粘り強さに強く関わると考えられるアンケート項目（図14）では「取り組める」と回答した生徒が3名から14名と増加している。生徒が探究的な学習過程を通して自分なりに地方自治体に向けての政策を考え、提言する学習過程によって生徒の主体性が育成されたことが分かる。

「友達の意見を聞きながら自分の意見をよりよいものにしようとしている」というコミュニケーション能力と粘り強さに強く関わるアンケート項目（図15）では「できる」と回答した生徒が6名から10名へ増加しており、実践後は「あまりできない」と回答した生徒は減少した。

「毎時間の学習内容を活用して自分の意見を作り出すことができる」という粘り強さに強く関わるアンケート項目（図16）では「できる」と回答した生徒が4名から12名と増加し、「あまりできない」と回答した生徒は10名から2名と大幅に減少している。探究的な学習過程を通して生徒が必要な資料を収集、整理・分析し、中間検討を踏まえ考えを再構成する場面を設定したことは相手意識をもちながら学習を進めることができ、主体性や粘り強さ、コミュニケーション能力が高まったことを生徒自身も実感することができ、有効な手立てであったことが明らかとなった。

今回のアンケート調査から探究的な学習過程の設定とICTを用いた遠隔合同授業の実践は主体性、粘り強さ、コミュニケーション能力を高めることができたとと言える。

自己肯定感に関するアンケートで比較すると「私は発言や発表などでクラスの生徒の役に立っていると思う」（図17）では「そう思う、ややそう思う」と回答した生徒は10名から18名と増加し、「自信をもって意見を述べるができる」（次ページ図18）については「そう思う、ややそう思う」と回答した生徒が9名から18名に増加した。探究的な学習過程の設定やICTを用いた遠隔合同授業を通して他者からの肯定的な評価が得られる場面

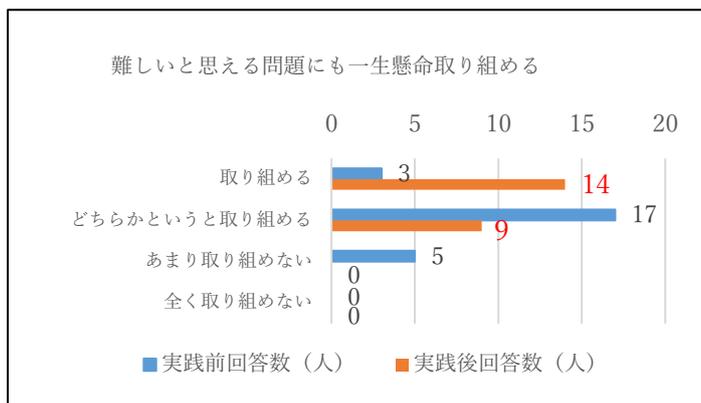


図14 アンケート調査結果

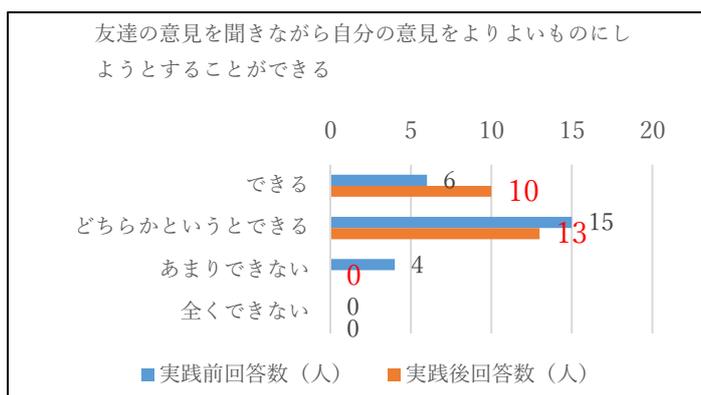


図15 アンケート調査結果

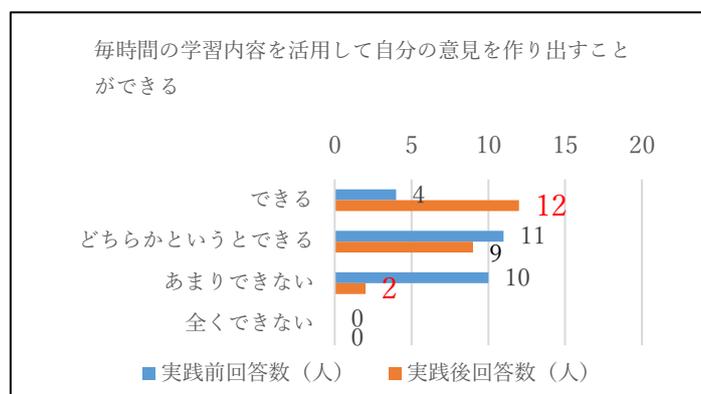


図16 アンケート調査結果

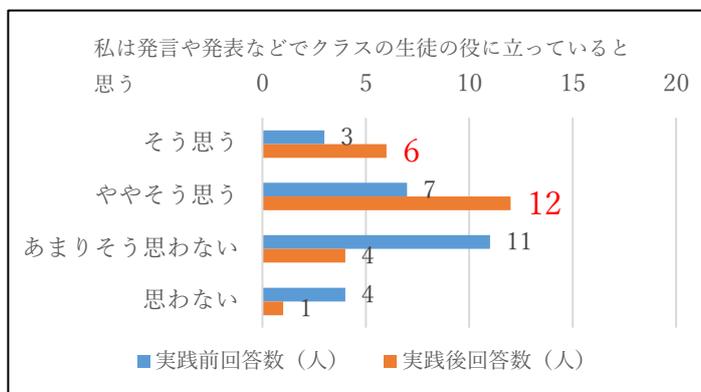


図17 アンケート調査結果

が多かったため自己肯定感が高まっている様子が見られたと考える。特に、日常交流する機会のない生徒達から肯定的な評価をもらう場面の中間検討や最終検討を設定したため、「他者からの評価への自信」の面から自己肯定感が高まったと考えられる。

「経験に基づく自信」の視点からは「授業や単元を終えて勉強したことが身に付いたと感じ取ることができる」（図19）という質問項目でアンケートを実施した。「できる」と答えた生徒が4名から16名に増加した。探究的な学習過程を通じて主体的に粘り強く学習する学習経験を積むことで充実感や達成感を生徒自身が感じ取れたため、アンケート調査の値が高く表れたと考えられる。

本研究の手立てである「探究的な学習過程の設定とICTを用いた遠隔合同授業」は主体性、粘り強さ、コミュニケーション能力が育ち、自己肯定感が高まり、主題に設定した目指す生徒の姿である「昨日の自分を超えようとする生徒」が育成されたことがアンケート調査からも明らかとなった。

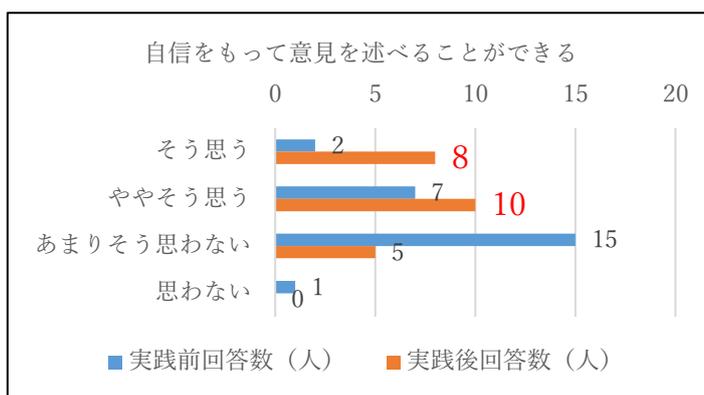


図18 アンケート調査結果

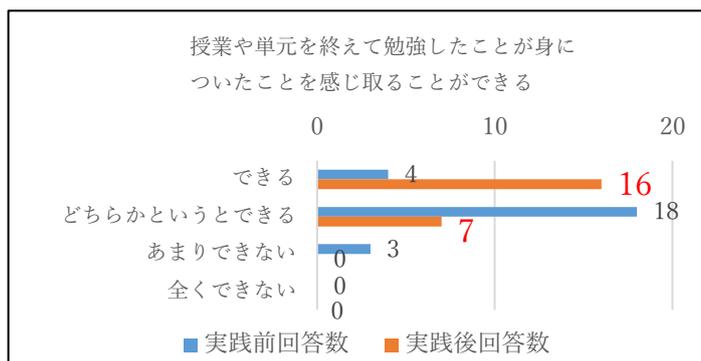


図19 アンケート調査結果

Ⅶ 研究のまとめ

1 成果

- 探究的な学習過程の設定とICTを用いた遠隔合同授業の実践を行ったことで、生徒の主体性、粘り強さ、コミュニケーション能力を育てると共に自己肯定感を高めることができた。ICTを用いた遠隔合同授業により、他の学校の生徒と話し合う中で、自分の発言が認められたことや探究的な学習過程を通して粘り強く、主体的に学習に取り組んだこと、この二点が自己肯定感の高まりに大きな効果があった。また、異なる生活環境で暮らす他校の生徒と協働する活動を通して、自他の地域に対する理解が深まり、社会的な見方・考え方を育てるためにも有効であった。
- 探究的な学習過程を取り入れることで生徒主体の学習活動を展開することができた。そのため、課題について粘り強く主体的に学習する態度が育成された。また、探究課題を通して「現実的な諸課題」について考えたことで、生徒の社会的な見方・考え方が育成された。
- ICTを用いた遠隔合同授業を実施する単元構成や実施方法について研究を進めることができた。また、両校の生徒が発表しやすくしたり、コミュニケーションを取ったりするための有効な支援方法についても研究することができた。小規模校の社会科の授業では多様な見方・考え方に触れる場面での授業を実施する際に教師が難しさを感じることもある。その際は本研究を活用することができると思う。

2 課題

- 「主体性」、「粘り強さ」、「コミュニケーション能力」などの成長を促し、「自己肯定感」が高まった姿を目指すには本研究のような実践を継続的に進めて行く必要がある。なお、検証方法については更に研究を進めていく必要がある。

- ・ 探究的な学習過程の設定とICTを用いた遠隔合同授業に適した探究課題についての設定が難しく、地域差や学校の特色を踏まえながら学習課題を設定する必要がある。
- ・ 定期的な実施に向けて、時間割や学習進度の調節、ICT環境の整備などの課題がある。生徒のICTスキルを高めるために、日常的にICTを用いた授業展開を各教科で実施するのはもちろんのこと、年間指導計画の見直しや学校カリキュラムの調整が必要である。

VIII 提言

- ・ 群馬県内でオンラインの交流がしやすい環境づくりを進め、探究的な学習過程の設定とICTを用いた遠隔合同授業の実践を通して、生徒の自己肯定感を高めることや主体性、粘り強さ、コミュニケーション能力を育てることができるよう実践を積み上げていく必要がある。
- ・ 誰一人取り残さない教育の実現のため群馬県内でオンラインでの交流がしやすい環境づくりが必要である。別資料の「小規模校の遠隔合同授業実施のためのICTの活用状況の調査」を今後のICT環境整備に活用してほしい。

<引用文献>

- 1) 中央教育審議会（2021） 「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して」 文部科学省
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf（2023-05-15）
- 2) 文部科学省 『中学校学習指導要領解説社会科編（平成29年告示）』 東洋館出版社

<参考文献>

- ・ 文部科学省 『中学校学習指導要領解説社会編（平成29年告示）』 東洋館出版社
- ・ 群馬県教育委員会 『はばたく群馬の指導プランⅡ』（2019）
- ・ 一般財団法人 日本生涯学習総合研究所 「非認知能力」の概念に関する考察（Ⅱ）～「非認知能力」の要素における関連性の観点から～（2020年11月 一般財団法人 日本生涯学習総合研究所）
- ・ 新・群馬県総合計画
- ・ 文部科学省 遠隔教育システム活用ガイドブック第3版（2021）

<担当指導主事>

阿左見 充良 西原 和久